

# 「先祖からの情熱を次代に伝える」

## 井ノ口佛壇店（八女）

製造部門は長男の賢一さん、次男の達弥さんによって引き継がれている。

賢一さんは四十四歳。

高校卒業と同時に京都の宮絵師安川で彩色の修業を四年半に亘って積み、現在は彩色の仕事の他、積極的な営業を展開。

達弥さんは三十七歳。

彦根で塗りを学んだ。

店舗奥には工場があり、賢一さん達弥さんを中心にして、仏壇・仏具・寺院仏具の仕事を行っている。工場は塗装ブースも備えている。

井ノ口社長自身、彫刻刀を持ち、先祖から伝えられてきた図面を元に、彫刻を行うこともある。井ノ口佛壇店の製造に対しての情熱が、こうして伝えられている。

◎井ノ口佛壇店 八女市大正町七五五―一八 TEL〇九四三（二三）五五八八 FAX〇九四三（二三）五八七五

行き、椎名某の下で修業を積み、八女に戻って以降、商売を伸ばす。

現社長の井ノ口敬三氏は昭和十八年（一九四

三）生まれ。敬三の敬は祖父敬男の敬、三は曾祖父で先代の三平氏の名前からとった。昭和三十六年、高校卒業と同時に京都の仏具問屋に修業に行

き、昭和三十八年に八女に戻ってきた。

「高校の卒業式の翌日に京都に行きました。私が奉公した時は、丁度親鸞聖人七百回御遠忌の時のことで、もの凄く忙しい時代でした。本願寺の門前にずらりと並ぶ仏具屋さん、毎日自転車ですり

さんや真鍮仏具を届けていました。都仏具さんでは

住み込みで二年間奉公しましたが、毎日が勉強で充実した日々でしたね」

と井ノ口社長は振り返る。

井ノ口社長によれば、八女には仏壇の製造卸業が多かった中、井ノ口佛壇店の中興の祖である敬男氏の時代に小売業に転じており、昭和三十年代初頭には龕や柩などの葬祭具を作っていたとい

う。

当時、井ノ口佛壇店には住み込みで十人ほどの職人が居た。彫刻や塗り、彩色の職人などで、鹿児島川辺から修業に来た職人も居た。

「昼休みには三角ベースをしたもんです。市役所の職員さんも混ぜて欲しい、と一緒にやったこともあります」

壇は産地が形成され、仏壇製造業がすでに盛んになっていた時代である。

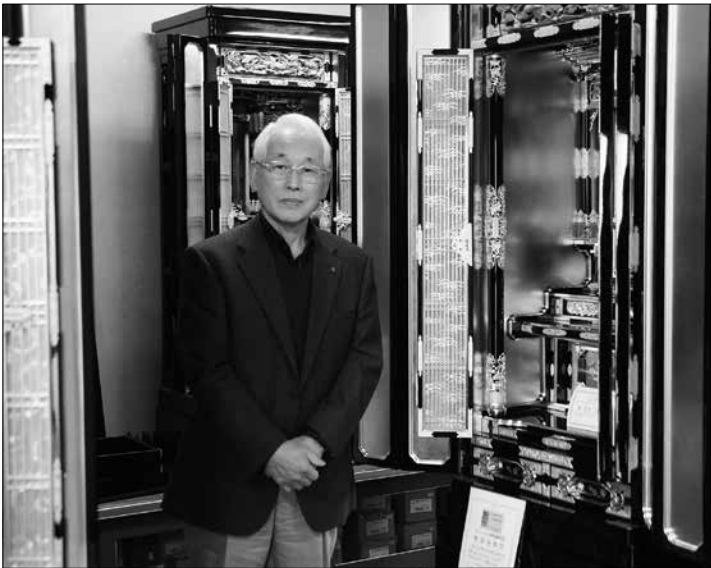
八女福島の福島は、現在の八女市中心街を指し、かつて精業と呼ばれた仏壇仕上げ業者の大半は福島地区にあり、明治三十七年には福島御室佛壇組合が設立されている。

御室というのも、この時代特有の用語で仏壇のことであり、前年明治三十六年には、粗製濫造を防ぐための証書がすでに発行されている。

井ノ口佛壇店の業容が確立するのは明治三十二年（一八九九）生まれの二代目井ノ口敬男（よしお）の時代である。敬男氏は京都に彫刻を学びに

八女福島仏壇の井ノ口佛壇店の創業は明治二十七年（一八九四）。初代は井ノ口三平、井ノ口家に養子に入り、仏壇の仕上げ屋を営み始めたが、途中商売が厳しい時もあり、新しい仕事を求めて車力（木製車輪の荷車）を引き鹿児島に引っ越しを試みたこともある。その時は桜島大噴火があり、移動中の人吉で鹿児島市内の灰の凄さを聞き及び、引き返したという。この大噴火はおそらく大正大噴火と呼ばれる大正三年のもので、それまでは海で隔てられていた桜島が噴出した溶岩により大隅半島と繋がっている。

この当時、八女福島仏



井ノ口敬三社長  
八女福島を代表する仏壇作りを続け、現在は二人の息子さんも製造と営業で活躍中



伝統の仏壇産地八女の中心にある井ノ口佛壇店